

## 御支援有難うございました！！

- 醍醐ポッポ館に於ける東日本大震災支援活動を終えて -

H23年5月7日

醍醐クリニック 無江 昭子

3月19日に立ち上げた醍醐ポッポ館に於ける被災者受入れ支援施設としての準備・物資備蓄活動は、1ヶ月後の4月20日の時点で、利用希望者はいないと判断し、ならばあずかった支援金・支援物資は、直接被災地に届けようとの思いとなりました。ゴールデンウィークに入れば、車・人の混雑で、被災地に行くことは難しくなるだろう、ならば4月23, 24日の土日を利用して、ということになりました。

4月23日(土)午前の診療終了後、支援者の運転するワゴンと乗用車の2台に、嵩張る布団類は残して米・缶詰などの食糧品と、58万円強の支援金のうち50万円を見舞金として持って、雨の中1時半過ぎに出発しました。行先は、松島・石巻と最終的に女川です。女川は、「ポッポ」館の名称のもととなったポッポちゃんの出身地だからです。私がかつて仙台の国立療養所西多賀病院に勤務していた頃、主治医になっていた重度の脳性小児麻痺児でした。

東北自動車道は、一関を過ぎると時折道路の凹凸があり、速度規制50kmの表示がありましたが、まあまあちょっと気を付けて走れば大丈夫という程度でした。しかし、長者原サービスエリアに近づくと、時速100kmを越えて走ったら身体が飛び上がって危険と思う程、路面が波打っていて怖い思いでした。災害支援の車が多い中、この波打つ高速道路の補修はいつ出来るのだろうかと思いました。

ほぼ3時間後の夕方4時半、最初の目的地松島海岸に着きました。車中泊も覚悟で出発しましたが、海岸駅のすぐ近くにある「ホテル大松荘」に宿泊出来ることがわかり、宿泊を申し込んだ後、近くの円通院・瑞巖寺を訪ねてみました。畳一枚程の石碑が倒れ、境内では土砂崩れのところもありました。近くの金松堂も菓匠三全も阿部のかまぼこも、外壁のあちこちが剥れたりして閉鎖中。歩道や側溝のあちこちがヒビ割れていて、どこの家・店にも空きスペースには浸水でもたらされたヘドロを処理したビニール袋が積まれた状態のままです。松島の被害が小さいといわれるのは建物が倒れなかったということで、海岸通りのお土産店や食堂は屋台の様に片隅で商売をはじめていたところも数軒ありましたが、水に浸かった一階部分の修復がまだまだの状態です。観光地としての松島の被害は大きいものでした。海岸の商店街にも、勿論、船着き場にも人影とてなしでした。

40名近くいるかと思われた宿泊客のほとんどは、石巻方面での仕事やボランティアのために来ている人達の様で、朝早く食事を済ませて出発していました。私達3人も近くに住む私の友人を見舞った後、8時前には石巻へ向かいました。前日はうっ

て変わって、かつてこんな青空を秋田では見たことがないと思う程の青空でした。松島から石巻までは三陸高速道を走れば良いと考えていましたが、現地の人達から渋滞するので一般道を行った方が良いといわれ、一般道を走りました。高速の渋滞ぶりが車窓から見えました。現地での情報はやはり大事です。

石巻地域に入ると葬儀時よく見る「家はこちら」の黒枠矢印の案内板があちこちに立っていました。もう震災発生から45日も経っているのに、遺体のあがるのが遅かった家なのかと思われました。人気もなくやはり異様な空気でした。石巻の市内に入って間もなく、石巻出身で女川地域を配達区域としている医薬品の卸会社に勤務するHさんと、女川で被災し、石巻に引っ越して生活を始めている私の知人Kさんの2人に、女川町に届ける支援金と物資の受け入れ場所への案内を御願いし、5人で女川町へ向かいました。商店も皆閉店状態で、町内を歩いている人とほとんど見かけられない石巻の市街地で、見知らぬ人に行先を教えてもらうなどは出来ないことでした。信号機はきちんと作動しているところもあれば、自動車の往来が激しいところでは警察官が手信号で誘導したり、点滅だったり、全く動いていない信号機もあり様々でした。

1時間程走り女川町の海岸地域に入ると、車の通る道路を除いて見渡す限りの土地全てがガレキ集積場状態で、報道番組で見た風景そのままでした。重機が入っている所は見当たりませんでした。女川町の海を臨む最も高い所に、町の総合グラウンドがあり、そこにある女川第二小学校が仮庁舎となっていて、町長も引切り無しの接客対応をしていました。案内してくれたKさんが一目私を町長へ紹介したいといってくれましたが、この多忙きわまりない時にと遠慮して、支援金を会計受付の方に渡して来ました。事務的処理がスムーズに行われているのでしょうか。日曜日に渡したこの50万円に対する御礼状と領収書が、火曜日午前中に日付のない料金後納印の郵便で私のもとに届きました。この第二小学校の玄関に隣接する体育館で、自衛隊員もまじって食糧物資の受け入れをしており、そちらに米・缶詰・飲み水などを引き渡しました。

この体育館で支援活動をしていた人から女川町出島の方達が女川第一小学校で集団避難生活を送っていることを聞き、ポッポちゃんの両親の消息を得るべく別の高台にある第一小学校へ行きました。松島で見舞った私の友人は、仙台で亡くなった娘さんの遺体が津波後にすぐ発見され、残されたお孫さんを松島の自宅に呼び面倒をみているということで、津波発生から45日経っていても毎日泣き暮らしているのではと思われる表情でしたが、この第一小学校で100人近くも集団で暮らしているという女川町出島の方達には、そういう涙を思わせる表情は誰にも見られませんでした。同じ思いの方達が集団にいることの救いであろうと感じました。ポッポちゃんの両親は高齢となって体も不自由となったので、施設に入るという連絡を昨年秋にもらった後、音信不通でした。第一小学校に入ると丁度昼食時で、校舎の出入口近くに炊き出しの給食をもらいに来る人達が集まっているところでした。受付では両親の消息は解らな

いというのでその場に集まっている方達に聞きまわったところ、ポッポちゃんの家と親戚だという人に出会って、何と第一小学校からさほど離れていないグループホームに夫婦で入居していることがわかりました。車で数分の緩やかな坂道を登ったところにある新しいこじんまりしたグループホームで2人に会えました。認知症の進んだポッポちゃんのお父さんと、お母さんの方もだいぶ体力がおちている状態でした。津波はグループホームの庭先まで押寄せたが、それ以上は来なかったということでした。

しばし談笑してグループホームを出発し石巻へ向う途中で、車に積み残されていたタオル類や紙類に気付く、これらを石巻の社会福祉法人の「つつじ会」へ提供して来ました。石巻から道案内してもらった方達と別れた頃は、とうに昼を過ぎていました。朝7時前の朝食で空腹ではあったのですが、東北自動車道に入るまで見かけた食堂では3人共昼食をとる気分にはなりませんでした。早くこの被災地から逃れたいような気持ちがありました。東北自動車道「長者原サービスエリア」で遅い昼食をとった時、ふと、やはり人間は何よりも精神的な思いが優先されるのだと強く感じました。石巻を出発した後、古川市の方向を示す案内板がなくて、古川インターに向うのに少し苦労したのですが、古川市は市町村合併で名称が変わり大崎市になっていました。

4月29日祝日の午前中、地域の方々に応援を御願ひして残っている布団類やシーツなどを圧縮袋に詰め込み、宅配業者2社に発送の見積もりを依頼したところ、1社はコンテナ3個でも足りなさそうだから料金も6万円以上かかる計算でしたが、友人のつてで紹介してもらった1社がチャーター便料金4万5千円で請け負ってくれることとなり、5月2日朝出発のチャーター便に乗せ、その日の夕方には女川町支援物資受付センターに無事着いた旨、前記の石巻のKさんから連絡をもらいました。

これでだいぶ肩の荷をおろした気分でも報告書を書きました。会計報告は別紙です。被災された沢山の方々の健康を祈るしかありません。

#### - ポッポちゃんのこと -

彼は、時折ちょっと笑った様な表情をする10歳で亡くなった経鼻胃管栄養の重度脳性小児麻痺児でした。私が国立療養所西多賀病院の重心病棟で担当した6年程の間、女川の出島に住む両親は、高齢で出来たこの「ポッポちゃん」(職員がつけた愛称です)を愛し、具合が悪くなったと病棟から連絡すると夜中でも出島から船を出しタクシーを乗り継いで西多賀病院に駆けつける様な方達でした。母親は看護師で、病棟に来るといつも他の障害児にも優しい言葉をかける物静かな方でした。「ポッポちゃん」が亡くなった年の夏、出島の高台にあるお墓を10数名の職員で訪ねたのです。石段を高く登った海が見えるお墓は、今回の津波で大丈夫だったろうか、まだ聞いていません。施設に居て、詳細までは聞いていないかもと気遣われて、話題に出せませんでした。

私をして、脳性小児麻痺について学ばせ、生きるということを考えさせ、物云えぬ重

度の障害児が、いかに多くのことを教えることが出来るかを気付かせてくれたのがポッポちゃんでした。このポッポちゃんの思い出としての「ポッポ館」なのです。

グループホームに居られた認知症のお父さんは25年ぶりに、パーキンソン病を患っていたお母さんには17、18年ぶりにお会いしました。此度、被災地に行く決めてからは心待ちでした。自ら運転してでもと思ったのですが、私の子供らに、「自分が迷惑をかける様なことになったら意味ないよ」のひとことに納得しました。此度は是非会いたいと思っていた松島、石巻、女川の方達に会えたのですが、出来たら気仙沼、大船渡の友人にも会いたいし、少しは医療奉仕だって出来ると思うのですが、やはり世話になる様なことがあってはと、はやる気持ちを抑えております。近いうちに出来な  
いかなあーと。